



ダンプカーから 降りてもダンプカー

ベリーダンサー tazuko



普段言葉を持たないダンサーが、言葉で自分のことを発する。このエッセイを書くにあたり、とても気恥ずかしい気分です。ばいになっています。

私は今でこそ、ベリーダンサーとして女性らしくあるものの、幼い頃は空手少女で、好きな映画は「ベストキッド」。男の子に交じって格闘ごっこをするのが好きで、毎日擦り傷だらけ。思春期はパンクロックミュージックが好きで、金髪ショートヘアーで、ライブハウスでモッシュ&ダイブ。男っぽい性格は今でも変わらず、パンクロックを聞きながら、暇を見つけてはYouTubeで格闘技の動画を見漁っています。

そんな私が、隠微なエロスで見ると魅了するベリーダンスなる道に進むきっかけとなったのは、「男子にモテたい」という、男子が女子にモテたいというだけの理由で突然ギターをやりだすような、そんな至極

単純で楽観的な理由でした。

ベリーダンスのべの字も知らないまま、勝手なイメージで、ベリーダンスを求めて、トルコやエジプト、モロッコ、フランス、NYなど、3年ほど武者修行だっ！と気の赴くま^{おもむく}まに放浪し、よし！ダンサーやるぞっ！と満を持して帰国。

とそこまでは、若さというダンプカーに乗っていたこともあって、向こう見ずに、そのけそこのけとまっすぐに突き進んでこれたのですが、日本に帰ってきて初めて、「ダンスで喰っていく」ということがいかに大変かを痛感しました。

「好きなダンサーは？」と聞かれて、どれくらいの方が答えられるのでしょうか。「好きなミュージシャンは？」「好きな格闘家は？」その問いには、多くの方が答えられるはずなのに…。

私がまっすぐと信じ選んだ道は、ほとんど

ど絵空事のようなものと知ったのでした。

初めから師を仰ぎ歩んでいけば、もしかしたらなんらかの道は伸びていたのかもしれない。でも、勢いまかせてダンプカーを乗り回していたものだから、ダンプカーがエンストした瞬間…全てが障害物。

自分がどこにいるかわからない。道があるんだか、ないんだかもわからない道を擦り傷だらけになりながら、一人歩き、自分はダンサーだっ！と信じるのがやっつ。その一方で、3年ほど前から生計を立てるために、東京と地元の沖縄にスタジオを構え、インストラクターとしての活動を始めました。

現役ダンサーがインストラクターだなんて邪道だと、今でも心の片隅で思います。だからなのでしょう、類は友を呼ぶとはよく言ったものです。レッスンにきてくれる後進のダンサーたちと昔の自分が見事に重なり、当時を思い返しては、反省したり、感謝したり、赤面したりしています。仕方なしに始めたインストラクター業務だったのに、気づけば親心が芽生え、後進のダンサーたちに少しでも苦勞をかけないようにと、世話のひとつやふたつもやきたくなるものなのです。

自分が通ってきた道を返り、歩みやすく整備し、自ら道しるべになることを意識していましたが、昨年、スタジオの3周年の祝いの中で、後進ダンサーたちの踊りをみて、最近、「芸の道、まっすぐと歩みやすく整備すべからず」迷子になるくらいが

ちょうどいいのかもしれないなと思うようになりました。過保護に育てる必要なし。自分のまっすぐだと思ふ道を行け！と心から願います。

道がないなら切り開けばいい。結局、挑戦し続けていくことでしか、芸の道は開かれないのでしょうか。ベリーダンスを始めて今年で10年目。そんな当たり前のことに気づくのに、実に10年もかかりました。

今までの10年の道を振り返り、道とはとても言えない不格好な険道がそこにあります。きっと同じく不格好で見ている人をヒヤヒヤさせるステージだったのでしょうか。

一瞬で消えてなくなる造形なき創造の儂さと潔さに、踊りの美学があると私は常々思っているのですが、ステージに立つその一瞬には、確かに歩んできた道のりの中で得た全てがあります。失った傷みがあります。

「過去は身体に、未来は精神に宿る」と、敬愛するダンサーさんが昔、おっしゃっていたことを日々想います。過去を持ってして、未来を魅せる。ダンサーって本当に素敵な仕事だと思えます。日々、怠ることなかれ、見失うことなかれ。その信念が道となるのでしょうか。

これからの10年、私はどんな道を歩み、その軌跡はどんな道になっているのでしょうか？少しは、“様になる道”にしたいものです。

ベリーダンスを始めてモテるようになったかですって？それは秘密です。